

図書ニュース 第5号

2008. 12. 6発行
大阪府立北野高等学校 図書館

元気の出る本

いつの時代も、マスコミは、元気が出る「いい話」よりも、気持ちが暗くなる「よくない話」を多く報道してきたと思われます。圧倒的に……。とは言うものの、やはりこのところのニュースは人々の希望（特に若い人の）を砕いてしまうようなものばかり。しかし、この不安定で混沌とした社会情勢は何か新しい動きが始まる予兆のような気がします。少し前まで、わが国には「お金より心が大事」ときっぱり言い切るのがためられるような空気がありました。女性は、結婚相手に「3高」を求めるのが当たり前、男は高級車に乗っていないとカッコつかない……。今はどうでしょうか？一部にそんな空気はまだ残っているかもしれませんが、かなり違ってきていますね。随分、まともになってきていると思うのです。

言うまでもなく、どんな時代でも、幸せな心で生きていくことが出来る人は必ずいるはずです。そのためには、悲劇的にならず、まず元気を出すこと。ということで、今回の図書ニュースでは「元気の出る本」を特集してみました。

それでは、僭越ながら、最初に今回の「図書ニュース」の編集者、不肖音楽科佐々木自身の推薦本から……。いずれも、最近話題になっている本で、たまたま子ども（大学生）が持っていたのを借りて読んでみて、ここで紹介することにした次第です。

『夢をかなえるゾウ』 水野敬也著 飛鳥新社

150万部を突破した超ベストセラー、テレビでも放送されているので既に読んだ生徒諸君も多いかもしれない。ダメな自分を変えようと悪あがきする主人公に、インドの神様ガネーシャが、一見トンチンカンとも思えるアドバイスをしていく。半信半疑でしぶしぶそれを実行する主人公だが、少しずつ何かが変わっていく。自己啓発本的一种だが、面白おかしく書かれてあって、楽しみながら読み進めることができる。ガネーシャのアドバイスは、実は、結構、格言の如く昔から言われているような内容のことが多いのだが、こういう風に提示されると、今の若い人も、なるほどこういうことなのかと納得するのでは。

今の自分ではダメだ。変わらなくては……。特に高校時代は、思い悩むことの多い時期である。この本は、そういった若い人へのヒント集であり、色々な意味でやる気を引き出してくれるに違いない。

『日本でいちばん大切にしたい会社』 坂本光司著 あさ出版

タイトルを見て、「この本は高校生には関係ないわ。どうせ就職まであと何年もあるんや

し。」と思わないで、是非読んでみてほしい。近年、リストラや、過労死、従業員の使い捨てをはじめ、働くことに対して希望がもてなくなるような話題が多い。特に若い人の心中を察すると（一人の親としても）心が痛むのだが、この本を読んで、気分が随分楽になった。現在日本の中小企業の中で、そこで働く従業員や地域の人々の幸せを本気で考えた経営をし、しかもそれゆえに、順調に収益をあげているいくつかの会社を紹介した本である。読んでいて目頭が熱くなるような話も多く、日本にもこんなに素晴らしい会社があるのだということを知ることができて、心が明るくなり、希望が湧いてくる。「こんな会社に就職したい！」でも悪くはないが、諸君には、「こんな会社を作りたい！」と思ってもらいたい。

さてここからは、編集者以外の先生が薦める元気の出る本です。

『生命の暗号』 村上和夫著 サンマーク出版

心の持ち方で、よい遺伝子のスイッチをONにしよう。そうしたら、いいことが起こるかも・・・。

『私が答えます』 竹内久美子著 文藝春秋

なるほど～。みんなの疑問がスッキリ解決！

『燃えよ剣』 司馬遼太郎著 新潮文庫

時勢に左右されず、ただ剣のみのために生きるという信念を持った、土方歳三の単純さ(?)は今を生きるヒントになるかも。1年生は修学旅行までに読むとよい。

『城中の霜』 山本周五郎著 新潮社

時代小説の短編集です。一途な恋（ひやめし物語）または男の友情（桑の木物語）に元気づけられるでしょう。でも、私が一番好きな短編は図書館にないので新潮文庫版『艶書』でどうぞ。

『小学生日記』 華恵著 角川文庫

この子の文章を読むと、心を取りだして、見せてくれたような気になる。ひとつひとつの言葉が丁寧で、軽くもなく、重くもなく、悲しくもなく。日記ですから、悲しい話も、楽しい話も、嫌になったという話もある。だけど、身の丈で背伸びをしない。そんな姿勢がこの本の中にはあります。ああ、なんだか背伸びしちゃったなあ、と思った時、元気が出ますよ。

『体は全部知っている』 吉本ばなな著 文集文庫

太陽。空。空気。そして人の体。心。生きている丸ごとの中で、生きている丸ごとを感じる。寓話のような、ショートストーリーのような、ただ日常で起きただけのような。寓話のような、

ショートストーリーのような、ただ日常で起きただけのような。吉本さんは後書きで「体と本能に任せておけば、そんなに間違えることはない。」と書いています。元の氣に戻すこと。それが「元氣」かもしれないです。

『ケインとアベル』 ジェフリー・アーチャー著 新潮文庫 上・下

名門銀行出身のケインとポーランド移民からホテル王にのし上がるアベル。対照的な境遇に生まれた二人の大スペクタクル人生ドラマ。展開が楽しく、アメリカ史の勉強にもなる。著者 J. アーチャーの人生も波瀾万丈。はまった人は、続編『ロマノフスキ家の娘』→『大統領に知らせますか』（アメリカ初女性大統領誕生か？）も読んでみてください。

『坊っちゃん』 夏目漱石著 岩波文庫

『坊ちゃん』ではなく、『坊っちゃん』です。「三部作」を含む漱石の多くの作品と違い、数少ない明るい作品です。彼の松山中学在任期間は短く、田舎だとバカにされても、松山での漱石熱は凄く熱いのです。私の高校時代、必読課題図書でした。未読の人は是非。何故詳しいのか？それは母校（現松山東高校）が舞台だからです。

『空中ブランコ』 奥田英明著 文春文庫

「心が弱ってしまった人達がいる。自信に満ち自分の道を歩んで来たはずが、いつの間にか……。こんな筈ではない。誰か助けて〜！」ジャーン！登場するのは、医学博士伊良部一郎。その診断は果たして……。読後はスッゴク元気になります。（でも、彼にはあまり会いたくないなあ。）

『進化しすぎた脳』 池谷裕二 講談社ブルーバックス

若き医学博士である著者が高校生に脳科学について講義した記録。奥深く神秘的、綿密かつ曖昧な脳の複雑な世界を若い感性で軽妙に語る内容は深くて広がりがあるって引き込まれる。聞き手が高校生というのがまた面白い。

『人間万事塞翁が丙午』 青島幸男著 新潮文庫

東京下町の仕出し弁当屋一家の戦前から戦後にかけての物語。様々な人間がめまぐるしく出入りする家に起きる様々な事件をおおらかに乗り越えていく一家。「他人に寛容でおおらか」昔の「家」の持つ包容力に間違いなく元気づけられる。今の日本から「家」が消えたのはいつ頃だったのだろう。

『ある家族の会話』 ナタリア・ギンズブルグ著 白水社

著者の家族とその友達の間で交わされる「言葉」が軸になっています。お互いにだけ通じる呼び方や言い回しの数々に「家族というのは、各々、何て独特なんだろう！」と笑えます。

『浴室』 ジャン・フィリップ・トゥーサン著 白水社

ある日を境に浴室で暮らすことにした男の話。イメージの喚起力という小説の面白さが冴えています。(ストーリーは意味不明)

『ゆかいな理科年表』 スレンドラ・ヴァーマ著 ちくま学芸文庫

古今東西の科学者の奇想天外なエピソードが詰まっています。ついつい笑ってしまう。元気が出ること間違いなし。

『1年は、なぜ年々速くなるのか』 竹内薫著 青春新書

子どもは自分の誕生日をまだかまだかと待っている。1年が長いのだ。ところが、長ずるにつれて、あっという間に1年は過ぎていく。何故だろう。この本は、色々な仮説を立てて、その秘密を解き明かしていきます。どうも年のせいではなさそう。(しかし、この本は生徒向けというより職員向けかも……。まだまだ頑張れるんだと思えます。)

『数学ガール フェルマーの法則』 結城浩著 ソフトバンクパブリッシング

萌え系の数学。こんな本もあります。

『熱学思想の史的展開』 山本義隆著 ちくま学芸文庫

本格的な物理学史 ハードな読み物で元気を出そう。

『事的世界観の前哨』 廣松渉著 ちくま学芸文庫

タイトルがカッコいい。「物象化論の認識論的＝存在論的位相」実は未読です。